

第 2 会場 (本館 2 階 206 教室) 参加記

第 65 回例会は、例年通り、2025 年度に提出された修士論文の報告会として実施された。以下は、第 2 会場で行われた蒲大輝氏と佐藤彬子氏による報告の記録である。

第 1 報告では、蒲氏が「異人種間の連帯の分断—戦間期ハーレムのイタリア系と黒人による第二次イタリア＝エチオピア戦争への反応—」と題した修士論文について報告した。国際政治が機能不全に陥っていた 1930 年代、イタリア系と黒人による第二次イタリア＝エチオピア戦争への支援活動が展開された。従来の研究では、エチオピア戦争時、母国を支持したイタリア系とエチオピアを支持した黒人という対立が前景化される傾向があった。それに対して蒲氏は、ニューヨークのハーレムという場に注目し、イタリア系と黒人をともに可変的なアイデンティティを有するディアスポラとして捉え、トランスナショナルかつ多方向のネットワークの存在を明らかにし、当時のハーレムが複数の移動が集まり散じる繋留点として機能していたと論じた。コメンテーターの荒木圭子氏は、グローバル・ヒストリー、都市史、移民史、人種関係史などの複数の研究領域をダイナミックに横断する意欲作としての本研究を高く評価した。そのうえで、主に、アフリカにおける独立運動に直結するエリートが集結していたロンドンとの対比や、人種運動と反帝国主義・反植民地主義・反ファシズム運動などとの継続性・断絶性に関するコメントや質問が提示された。さらにフロアからは、ユダヤ系やプエルトリコ系など他のマイノリティとの関係性や史料に関するコメントと質問が寄せられた。

続く第 2 報告では、佐藤氏が「解放後フランスにおけるアメリカ軍の性病対策」と題した修士論文について報告した。本研究は、1944 年 6 月 6 日以降のいわゆる解放後フランスに駐留したアメリカ軍の性病対策について、軍隊が兵士をどのように管理しようとしたのかを、米軍内部の史料を用いて明らかにするものであった。米軍をやや一枚岩的に描く傾向があった先行研究に対して、佐藤氏は、米軍内の多様な職種・専門性等に着目することで、性病対策の立案、制度化、および運用の過程について詳細な分析を加えた。コメンテーターの豊田真穂氏は、とりわけ性病対策の実態の分析部分を実証研究として高く評価した。そのうえで、軍が兵士のセクシュアリティをどのように捉えていたのかという点や、管理の対象となった男性 (兵士) の身体から視点を少しずらす形で現地の女性の身体の管理という新たな論点などが提起された。

文責 中野由美子 (成蹊大学)